

ティモフェイに達する前書

第一章 一 パワエル、神我等の救主、及び主イエイス ハリストス、我等の望なる者の命を奉じて、イエイス ハリストスの使徒と爲れる者は、二書して信に於て我が眞の子なるティモフェイに達す。願はくは恩寵と慈憐と平安とは、神我等の父及びハリストス イエイス 我等の主より爾に賜はらんことを。三 我がマケドニヤに往く時爾にエフェスに留りて、或人人に誡めて、異なることを教ふるなく、四 又虚誕及び窮りなき系圖、即 神に於ける信の建立よりも多く争論を生ずる者に、意を用ゐざらしめんことを求めしが如く、今も亦然り。五 誠の目的とする所は愛なり、乃 潔き心と、玷なき良心と、偽なき信とに由る者なり。六 或者は此に違ひて、虚しき論に轉じ、七 教師と爲らんと欲して、自ら其言ふ所斷むる所を知らず。八 我等は律法の善きを知る、惟人法に循ひて之を用ゐるに在り、九 蓋知る、律法は義人の爲に設けたるに非ず、乃 不法の者、不服の者、不虔の者、罪惡の者、放肆の者、不潔の者、父母を弑する者、人を殺す者、一〇 淫行の者、男色の者、人を攘む者、誑を言ふ者、誓に背く者、及び其他健全なる教に悖る事の爲に設けたるなり、一一 我に託せられし洪福なる神の光榮の福音に循へるなり。一二 我に力を賜ひしハリストス イエイス 我等の主に感謝す、其我を忠なる者と視

て、役事の職に任せしに因る。一三 我は昔謗る者、窘逐する者、侮る者たりしが、知らずして、信ぜざるに由りて之を行ひし故に、矜恤を蒙りたり。一四 我が主の恩寵は、ハリストス イエイスに於ける信及び愛と共に豊に我の中に顯たり。一五 ハリストス イエイスは罪人を救はん爲に世に來たり、此れ信なる、全く受くべき言なり、罪人の中我第一なり。一六 然れども我が矜恤を蒙りしは、イエイス ハリストスが先づ我に於て全き寛忍を示して後、彼を信じて永遠の生命を得んと欲する者の模範と爲さん爲なり。一七 願はくは尊敬と光榮とは、萬世の王、壞る可からざる獨一睿智の神に、無窮の世に歸せん、「アミン」。一八 我が子ティモフェイよ、我爾に、曾爾を指しし預言に符ひて、此の誠を託す、爾が預言に循ひ、信と玷なき良心とを保ちて、善き戦を戦はん爲なり。一九 蓋或者は良心を棄てて其信を溺らせり、二〇 其中にイメネイ及びアレキサンドルあり、我彼等をサタナに付せり、彼等が神を讞らざることを學ばん爲なり。

第二章 一 故に我凡の事に先だちて勸む、衆人の爲、帝王、及び凡そ權を操る者の爲に、祈禱、祈願、懇求、感謝を爲さんことを、二 我等が凡の敬虔と聖潔とを以て、平安にして穩静なる生を度らん爲なり。三 蓋此れ我等の救主神の前に善にして納れらるる事なり、四 彼

は衆人が救を得、及び眞實を知るに至らんことを欲す。五 蓋神は一なり、神と人との間には中保者も亦一なり、乃人ハリストスイエスス、六 衆人の贖の爲に己を與へし者なり。此の證は其期に於て已に在りき、七 我之の爲に立てられて、宣傳者と爲り、使徒と爲り、ハリストスに在りて眞實を言ひて謊らず、信と眞實とを以て異邦人を教ふる師と爲れり。八 故に我望む、男は潔き手を擧げて、怒なく、疑なく、何の處に於ても祈禱を爲さんことを、九 女も亦宜しき合ふに衣を衣、廉耻貞潔にして自ら飾るに、髪を編むこと、或は金、或は眞珠、或は高價なる衣を以てせず、一〇 乃神に事ふるを約せし女に稱ふが如く、善行を以てせんことを。一一 女は幽静にして、全く順ひて學ぶべし。一二 女には教ふること、又男の上に權を執ることを許さず、乃幽静なるべし。一三 蓋アダムは前に造られて、エワは後なり。一四 且アダムは誘はれしに非ず、乃婦は誘はれて罪に陥れり、一五 然れども若し信と愛と聖と貞潔とに居らば、子を産むに因りて救を得ん。

第三章 一 信なる哉、是の言、人若し監督の職を得んと欲せば、善き事を望むなり。二 唯監督は責む可き所なく、一婦の夫たるべく、謹慎、廉節、端正たるべく、懇に遠人を待ひ、善く教訓を施し、三 酒を好まず、人を毆たず、汚利を圖らず、温和にして、争を好ま

ず、財を貪らず、四 善く其家を齊へ、凡の端莊を以て其子女を順從せしむべし、五 蓋其家を齊ふるを知らざる者は、如何にして神の教會を理むるを得ん。六 新に教に進みし者たるべからず、恐らくは誇りて、惡魔と同じく審判に服せん。七 亦外の人より善く證せらるる者たるべし、恐らくは誹毀、及び惡魔の網に陥らん。八 役事も亦端莊にして、二舌ならず、酒を嗜まず、汚利を貪らず、九 潔き良心に信の奧義を保つ者たるべし。一〇 是くの如き者は、先づ是を試みて、若し責むべき所なくば、則役事の職に當つべし。一一 婦も亦端莊にして、讒毀せず、謹慎にして、凡の事に忠信なる者たるべし。一二 役事は一婦の夫にして、善く其子女と其家とを理むる者たるべし。一三 蓋善く役事せし者は、己の爲に上級と、ハリストス イイススに由る所の信に於ける大なる勇敢とを得るなり。一四 我速に爾に至らんことを望めども、此を書して爾に達す、一五 我若し遅はらば、爾が如何に神の家、即活ける神の教會、眞實の柱及び固なる者に、行ふべきを知らん爲なり。一六 論なく、敬虔の奧義は大なり、神は肉體に顯れ、神に由りて義とせられ、天使等に見られ、諸民に傳へられ、世界に信ぜられ、光榮の中に擧げられたり。

第四章 一 神は明に言ふ、後世或人人信を離れて、誘惑の諸神、及

び魔鬼の教を納るるあらん、二是れ其良心の烙かれたる虚言者の偽善に由りてなり。三彼等は嫁娶を禁じ、信じて眞實を知る者が感謝して食はん爲に神の造りたる食品を斷つことを命ず。四蓋悉くの神の造物は善にして、棄つべき者なし、惟感謝して之を受くべし、五神の言と祈禱とを以て聖にせらるるが故なり。六爾等此等を兄弟に勸めば、イイススハリストスの善き役者、信の言及び爾が従ひし善き教に育はるる者と爲らん。七卑しき虚説及び老婦の奇談を避けよ、自ら敬虔に練習せよ。八蓋肉體の練習は益少し、惟敬虔は一切の事に益ありて、現在及び未來の生命の許約を得るなり。九此れ信なる全く受くべき言なり。一〇蓋我等は此が爲に勞して謗を受く、乃活ける神に望あるに因りてなり、彼は悉くの人、特に信者の救主なり。一一爾此等の事を戒め且教へよ。二人爾年少きを以て輕んずべからず、乃爾言に、行に、愛に、信に、信仰に、潔淨に於て、信者の模範と爲れ。一三讀書と、勸諭と、教訓とを、務めて、我が來るを俟て。一四爾に在る恩賜、預言に由りて、長老の按手を以て、爾に授けられし者を忽にする勿れ。一五此等の事を思念し、専ら之を務めよ、爾の上達が衆に顯れん爲なり。一六己と教ふる事とを慎め、恒に之に居れ、蓋斯く行ひて、爾は己及び爾に聽く者を救はん。

第五章 一老人を嚴責する勿れ、乃彼に勸むること父に於ける如くせよ、少き者には兄弟に於ける如く、二老女には母に於ける如く、少き女には、凡の潔淨を以て、姉妹に於ける如くせよ。三嫠を敬へ、即眞の嫠なる者を。四然れども若し嫠に子或は孫あらば、彼等先づ己の家に孝敬を行ひ、其親に恩を報ゆる事を學ぶべし、蓋是れ美にして神の前に納れらるべき事なり。五眞の嫠にして獨なる者は、神を頼みて、晝夜祈禱祈願を爲す、六然れども樂を縱にする者は、生くとも、死せるなり。七爾此を以て彼等を戒めて、責むべき所なからしめよ。八人若し己に屬する者、殊に己の家族を顧みずば、信に背き、不信者よりも惡しき者なり。九嫠の藉に登せらるるは、六十歳より少からず、一夫の婦たりし者、一〇善行を以て證せらるる者、若くは子女を育て、若くは遠人を館し、若くは聖徒の足を濯ひ、若くは患難の人を助け、若くは凡の善事に従ひし者たるべし。一一然れども少き嫠を受くる勿れ、蓋彼等ハリストスに背きて、心を亂す時は、復嫁がんと欲す。一二彼等は罪に定められん、其初の信を棄てし故なり。一三且彼等は間暇にして、人の家を廻るを習ひ、第間暇なるのみならず、亦多言を爲し、見聞を好み、言ふべからざる事を言ふなり。一四故に我少き嫠の復嫁ぎ、子を生み、家を齊へ敵に一も譏るべき機を與へざらんことを欲す。一五蓋彼等の中には己に轉じてサタナに従ひし者あり。一六若し信男或は信女に

養ふれば、之を養ふべし、教會を煩はす可からず、之をして眞なる養ふを得しめん爲なり。一七 善く治むる長老は、倍して之を敬ふべし、言と教とを以て勞する者には、殊に然すべし。一八 蓋書に云く、穀物を踐み落す牛には口を閉づる勿れ、又云く、勞する者其値を得るは宜しきなりと。一九 長老を訟ふることあらば二三の證者あるに非ずば、之を受くる勿れ。二〇 罪を犯す者を衆の前に責めよ、他の者も懼を抱かん爲なり。二一 我は、神及び主イエスハリストス及び其選びたる天使等の前に於て、爾に戒む、此を守りて預見を執るなく、一も偏視して行ふ勿らんことを。二三 遽に何人にも手を按する勿れ、人の罪に與る勿れ。自ら潔きを守れ。二三 是より水のみを飲む勿れ、乃少しく酒を用ゐよ、爾の腹の爲、及び爾が屢疾むに因りてなり。二四 或人の罪は明にして直に審を受けしめ、或人の罪は後に顯る。二五 是くの如く善行も亦明なり、然らざる者も隠るる能はず。

第六章 一凡そ軛の下に在る僕は、己の主を以て全く敬ふべき者と爲すべし、神の名と教との其知られざらん爲なり。二 信者たる主に屬する僕は、其兄弟なる故を以て、之を輕んずべからず、乃益勤むべし、其信者にして、愛せらるる者、恩寵に與る者たるに因りてなり。爾此等を教へ且勸めよ。三 異なることを教へ、我等の主イ

スハリストスの醇正なる言、及び敬虔の教に従はざる者は、四 自ら驕り、知る所なく、討論争辯の病あり、之よりして娼嫉、分争、訕謗、悪しき疑、五 又智慧を亂し、眞實を失ひ、敬虔を以て利を獲る者なりと意ふ人人の空論は生ず。爾是くの如き者より遠ざかれ。六 敬虔にして、足ることを知るは大なる利なり。七 蓋我等は何者をも世に攜へ來らざりき、何者をも之より攜へ去るを得ざること明なり。八 食あり、衣ありて、我等足れりと爲すべし。九 富を得んと欲する者は、誘に、網に、人を災難と沈淪とに溺らす所の無智にして害ある多くの慾に陥るなり。一〇 蓋利を貪るは萬惡の根なり、或者は之に耽りて、信より離れ、多くの苦を以て自ら刺せり。一一 神の人よ、爾此等を避けて、義、敬虔、信、愛、忍耐、溫柔を追へ。一二 信の善き戰を戦ひ、永遠の生命を執れ、爾は之に召されて、多くの證者の前に善き承認を作せり。一三 我萬有に生を施す神の前、及びポンテイイピラトに對して善き承認を證せしハリストス イイスの前に於て爾に命ず、一四 玷なく、責むべきなく、我等の主イイスハリストスの顯現に至るまで、誠を守らんことを。一五 神は其期に届りて、此の顯現を示さん、即有福にして、獨一權能なる神、諸王の王、諸王の主、一六 獨一不死を有つ者、近づく可からざる光に居る者、人の未だ曾て見ず、又見ること能はざる者なり。願はくは彼に尊榮と永遠の權能とは歸せん、「アミン」。一七

爾此の世に於て富める者に戒めよ、彼等が高ぶらずして、定まりなき富を恃むなく、乃我等に樂との爲に豊に一切を賜ふ活ける神を待み、一八恩恵を行ひ、善行に富、悋まらずして施を爲し、善く人と交り、一九斯くして永遠の生命を得ん爲に、未來に善き基を爲す財を己に蓄へんことを。二〇嗚呼ティモフエイよ、爾に託せし事を守りて、妄なる虚言、及び偽りて知識と稱する反論を避けよ、二三或者は之に耽りて、信に背けり。願はくは恩寵は爾と偕に在らんことを、「アミン」。

ティモフェイに達する後書

第一章 一パウエル、神の旨に由りて、ハリストス イイススに在る生命の許約に循ひて、イイスス ハリストスの使徒と爲れる者は、二書して至愛の子ティモフェイに達す。願はくは恩寵と慈憐と平安とは、神父、及びハリストス イイスス我等の主より爾に賜はらんことを。三我先祖より 潔き良心を以て事ふる所の神に感謝す、晝夜我が祈禱の中に爾を記念して已めざるに因る、四且爾の涙を念ひて、切に爾を見んことを望む、我が喜に滿てられん爲なり。五蓋我爾の偽なき信を憶ひ起す、此れ先に爾の祖母ロイダ、及び爾の母エウニカに居りき、我確に信ず、爾の中に居ることを。六是の故に我爾に、我の按手に由りて爾の中に在る所の神の恩賜を熾さんことを、記念せしむ。七蓋神の我等に賜ひしは、畏の神に非ず、乃能と愛と睿智との神なり。八故に爾我等の主イイスス ハリストスの證、及び彼の囚人たる我を以て、耻と爲す勿れ、乃神の能に循ひて、ハリストスの福音と共に 苦を受けよ。九神は我等を救ひ、且聖なる召を以て我等を召せり、是れ我等の行に由るに非ず、即其旨と恩寵とに由るなり、是の恩寵は世世の先よりハリストス イイススに於て我等に賜はり、一〇今我等の救主イイスス ハリストスの現るるを以て、明になりたり、蓋彼は死を滅し、生命と不朽

とを照せり、福音に由りてなり、一一我之が爲に立てられて、宣傳者と爲り、異邦人の教師と爲れり。一二是の故にを以て、我此等の苦を受く、然れども耻とせず、蓋我は我が信ずる者を知り、且彼が我の託せし者を彼の日に至るまで守らんことを能くすと確信す。一三爾ハリストス イイススに於ける信と愛とを以て、我に聞きし所の 醇正の言の模範を保て。一四我等の中に居る聖神を以て、良き委託を守れ。一五アシヤの者皆我を棄てたり、爾之を知る、其中にフィゲル及びエルモゲンあり。一六願はくは主は慈憐をオニシフォルの家に賜はんことを、蓋彼は屢我を慰め、且我が縲紲を耻とせざりき、一七乃 로마に在りし時、務めて我を尋ねて、我に遇へり。一八願はくは主は彼に、彼の日に於て、主の慈憐に遇ふことを賜はん、エフェスに在りて彼が如何ばかりか我に事へしは、爾更に能く之を知る。

第二章 一吾が子よ、是を以て爾ハリストス イイススに在る恩寵に堅固なれ。二又多くの證者の前に於て我に聞きし事を、忠信にして他人を教ふるを能する人に託せよ。三故に爾 苦を忍ぶこと、イイスス ハリストスの善き軍士の如くせよ。四凡そ軍士たる者は、度生の務を以て己を累はさず、彼を募れる者を悦ばしめん爲なり。五又力を角ふ者は、若し法に遵ひて角はずば、冕を得ず。六勞する農夫は先づ實を食ふを得べし。七我が言ふ所を察せよ、願はくは主

は爾に萬事を曉らしめん。ハダワイドの裔たる主イエス ハリストス、死より復活せし者を、我が福音に循ひて記念せよ。九此の福音の爲に我苦を受けて、犯罪者の如く繋がるるに至れり、然れども神の言は繋がれず。一〇故に我選ばれたる者の爲に、一切の事を忍ぶ、彼等もハリストス イエスに於て、救と永遠の光榮とを得ん爲なり。一一信なる哉、是の言、若し我等彼と偕に死せば彼と偕に生きん。一二若し忍ばば、彼と偕に王たらん、若し諱まば、彼も我等を諱まん。一三若し我等信ならずば、彼は常に信なるなり、蓋己に違ふ能はず。一四爾此等の事を記念せしめ、主の前に戒めて、争論なからしめよ、是れ一も益なくして、聴く者を亂すのみ。一五務めて己を嘉すべき者、耻を得ざる工者、眞實の言を正しく傳ふる者として、神の前に立てよ。一六妄なる虚言を避けよ、蓋彼等益不虔に進まん、彼等の言は脱疽の如く廣まらん。一七イメネイ及びフィリトは是くの如き者の中に在り、一八彼等は眞實に離れ、復活己に過ぎたりと言ひて、或者の信を圯る。一九然れども神の堅き基は立てり、是に印あり、云く、主は己に屬する者を知れり、又云く、凡そ主の名を稱ふる者は不義を離るべしと。二〇大なる屋には、第金及び銀の器あるのみならず、又木及び土の器あり、或は貴き用と爲る者あり、或は貴からざる用と爲る者あり。二一故に人若し此等を離れて、己を潔くせば、貴き用と爲り、聖にせられて、主宰の用に合ふ、凡の

善行に備へられたる器と爲らん。二三爾少年の慾を避けて、義、信、愛、凡そ清き心より主を籲ぶ者に於ける和平を追へ。二三愚魯不學の辯論を避けよ、争の是より生ずるを知らばなり、二四然れども主の僕は争ふ可からず、乃柔和に衆人を待ひ、喜く教訓を施し、忍耐を爲し、二五溫柔を以て、逆ふ者を戒むべし、神或は彼等に悔改を與へて、眞實を識らしめん、二六彼等が悪魔即彼等を捕へて己の旨を行はしむる者の網より脱れん爲なり。

第三章 一爾之を知れ、末の日に於て患難の時至らん。二蓋人は自愛、貪婪、驕傲、矜慢なる者、誹謗する者、父母に順はざる者、恩を識らざる者、不虔なる者、三無情なる者、和を好まざる者、讒言する者、慾を縦にする者、殘刻なる者、善を好まざる者、四信義を破る者、放肆なる者、自負なる者、神を愛するより佚樂を愛する者、五敬虔の貌ありて其實を棄てし者と爲らん。爾是くの如き者を避けよ。六人の家に竊み入りて婦を惑はす者は、若る輩に屬す、此の婦は即罪に溺れ、種種の慾に誘はれ、七常に學べども、眞實を識るに至る能はざる者なり。ハイアンニイ及びイアムブリイのモイセイに敵せしが如く、斯の輩、即智慧の壞られたる者、信の理に味き者は、亦是くの如く眞實に敵するなり。九然れども彼等は多く進まざらん、蓋彼等の無智は、彼の二人の遇ひし所の如く、衆人の前に露

れん。一〇 爾に至りては、我が教訓、品行、意志、信仰、寛容、仁愛、忍耐、一一 我がアンテイヤヒヤ、イコニヤ、リストラに在りて遇ひし所の窘逐、及び苦難に於て、我に従へり、此の窘逐は我之を忍び、主は我を悉く其中より救へり。一二 凡そ敬虔を以て、ハリストスイイスに在りて生を度らんと欲する者は、皆窘逐せられん。一三 悪しき人、及び人を欺く者は、益悪に進みて、人を惑はし、自も惑はされん。一四 然れども爾は學びし所の、及び爾に託せられし所に居れ、爾誰より學びしかを知ればなり。一五 且爾は幼より聖書を知る、即善く爾に、ハリストスイイスに於ける信に由りて、救を得しむる智慧を與ふる者なり。一六 聖書は皆神の感ずる所の者にして、教訓、督責、矯正、及び義に導くに益あり、一七 神の人が全き者のと爲りて、凡の善行に備へられん爲なり。

第四章 一 故に我は神及び我等の主イイスス ハリストス、即其顯現の時、其國に於て、生者及び死者を審判せんとする者の前に在りて爾に戒む、二 言を傳へ、時を得るも、時を得ざるも、勵みて之を勉め、凡の恒忍と教訓とを以て責め戒め、勧めよ。三 蓋時至らん、人人醇正の教を容れず、即其私慾に循ひて、己の爲に耳を悦ばしむる教師等を選び、四 耳を眞實より避け、轉じて虚説に向はん。五 然れども爾は一切の事に儆醒し、苦を忍び、福音者の工を行

ひ、爾の職を盡せ。六 蓋我已に祭として獻ぜらる、我が逝く時至れり。七 我善き戦を戦ひ、馳すべき程を盡し、信を守れり。八 今より後、義の冕は我の爲に備へらる、主、義なる審判者は、彼の日に於て、之を我に賜はん、第我のみならず、乃凡そ彼の顯現を慕ふ者にも賜はん。九 爾務めて速に我に來れ。一〇 蓋デイマスは斯の世を愛し、我を棄てて、フェサロニカに往き、クリスケントはガラテイヤに、テイトはダルマテイヤに往けり。獨ルカのみ我と偕に在り。一一 爾マルコを攜へて、偕に來れ、蓋彼は役事の爲に我に要する所あり。一二 我テイヒクをエフェスに遣せり。一三 爾來る時、我がトロアダに於て、カルプに託せしが外服を攜へ、又書籍、殊に革の者を攜へよ。一四 銅工アレキサンドル我に多くの害を爲せり。願はくは主は其行に循ひて彼に報いん。一五 爾も彼を防げ、蓋彼は甚しく我等の言に敵せり。一六 我が初めて己の事を訴ふる時、一人も我と偕にせざりき、皆我を離れたり。願はくは此れ彼等に歸せざらん。一七 然れども主は我と偕に立ちて、我を堅めたり、我に由りて福音は證明せられて、異邦人皆之を聞かん爲なり、我獅の口より脱れたり。一八 主は又我を諸の悪事より脱れしめて、我を其天國の爲に救はん。願はくは光榮は無窮の世に彼に歸せん、「アミン」。一九 爾プリスキラ及びアキラ、及びオニシフォルの家に安を問へ。二〇 エラストはコリンフに留れり、トロフィムは病を患ふるに因りて、我彼

をミリトに留めたり。二 爾務めて冬の前に來れ。エワウル、プロド、
リン、クラウドイヤ及び衆兄弟爾の安を問ふ。二 願はくは主イイ
ススハリストスは爾の神と偕にせん、願はくは恩寵は爾等と偕
に在らんことを、「アミン」。